

人間の言語は、「統辞構造(syntactic structures)」という文法に基づく構造を備えています。

これまで酒井教授のグループは、文法処理に選択的な脳活動をfMRIで調べて、「文法中枢」が左脳の左下前頭回と左運動前野外側部であることを明らかにしています。

統辞構造の計算原理を明らかにするためには、

文法中枢の活動変化を予想できるような言語学的モデルが必要です。

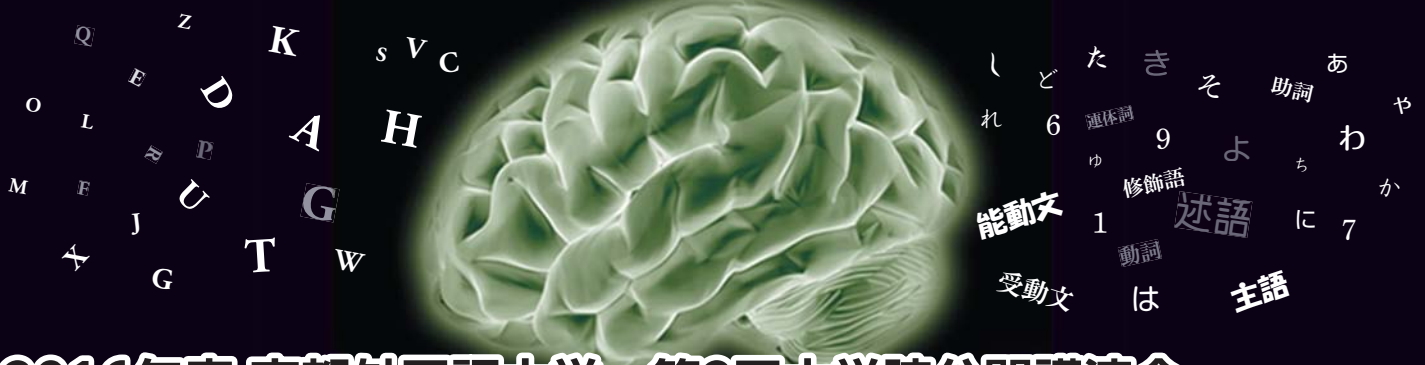
そこで、木構造の複雑さを定量化する上で鍵となる「併合度(Degree of Merger)」という概念を初めて提案して、

文法中枢の活動が併合度によって変化することを証明しました。

さらに、文法中枢の損傷によって「失文法」が生ずることを確立して、

文法機能が脳に局在することを明らかにしました。

こうした最近の成果について、予備知識がない方にもわかりやすくお話しさせていただきます。



2016年度 京都外国語大学 第2回大学院公開講演会

脳内文法の計算原理と 局在の証明

入場無料

事前申し込み不要

日時

10月8日(土) 14時~15時30分

会場

京都外国語大学 171教室 (1号館7階)

講師

酒井 邦嘉氏 (東京大学大学院総合文化研究科教授)



酒井邦嘉氏のプロフィール

1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。1992年東京大学医学部 助手、1996年マサチューセッツ工科大学 客員研究員、1997年東京大学大学院総合文化研究科 助教授・准教授を経て、2012年より現職。同理学系研究科物理学専攻教授兼任。2014年より日本学術会議連携会員。2002年第56回毎日出版文化賞、2005年第19回塚原仲晃記念賞を受賞。

言語科学関連の著書に『科学という考え方——アインシュタインの宇宙』(2016)中公新書、『高校数学でわかるアインシュタイン——科学という考え方』(2016) 東京大学出版会、『芸術を創る脳——美・言語・人間性をめぐる対話』(編著、2013) 東京大学出版会、『脳でわかるサイエンス1「ことばの冒険」』(2011) 明治書院、『脳の言語地図』(2009) 明治書院、『ことばの宇宙への旅立ち2——10代からの言語学』(2009) ひつじ書房、『科学者という仕事——独創性はどのように生まれるか』(2006) 中公新書、『言語の脳科学——脳はどのようにことばを生み出すか』(2002) 中公新書などがある。

京都外国語大学

